氏　　名	馬越　通有
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博　甲第　6557　号
学位授与の日付	2022 年 3 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科　生体制御科学専攻 （学位規則第 4 条第 1 項該当）
学位論文題目	Spinal Surgery after Bilateral Subthalamic Stimulation for Patients with Parkinson's Disease: A Retrospective Outcome Analysis of Pain and Functional Control （パーキンソン病患者における両側視床下核への脳深部刺激術は、脊椎手術後の疼痛軽減と機能維持に寄与する）
論文審査委員	教授 淺沼幹人　　教授 神谷厚範　　准教授 山下　徹

学位論文内容の要旨

パーキンソン病（PD）患者は、高齢化社会において罹患患者数も増加し、脊椎疾患を合併する症例も増えている。PD患者における脊椎手術は周術期合併症、再手術率が高く、難治症例となることが多い。一方、PDに対する脳深部刺激術（DBS）による治療効果が報告されているが、DBSを受けたPD患者における脊椎手術の予後に関する報告は無く、今回我々は当院における治療結果を評価・検討した。まずPD群と非PD群の脊椎手術の転帰を解析した。次にPD群において、DBS施行の有無による転帰の差異を解析した。PD群では腰痛が多く、疼痛改善率は非PD群と差がなく、周術期合併症は多かった。また、DBS群は非DBS群と比較して術2年後の腰椎の生理的前彎を有意に維持できており、疼痛の改善や機能維持との関連が示唆された。PD患者の脊椎手術において脳深部刺激術を含めたPDの良好な管理が重要である可能性が示された。

論文審査結果の要旨

パーキンソン病（PD）患者における脊椎手術は周術期合併症，再手術率が高く，難治症例となることが多い．一方，脳深部刺激術（DBS）は PD に対して治療効果を発揮するが，DBS を受けた PD 患者における脊椎手術の予後に関する報告は無い．

本研究では，PD 群と非 PD 群患者における脊椎手術の転帰と DBS 施行の有無による転帰の差異を解析した．PD 群では腰痛が多く，疼痛改善率は非 PD 群と差がなく，周術期合併症は多かった．また，DBS 群は非 DBS 群と比較して術 2 年後の腰椎の生理的前彎を有意に維持できており，疼痛の改善や機能維持との関連が示唆された．

委員からは，PD 群でなぜ周術期合併症が多いのか，DBS がどう脊柱のアライメントに影響すると考えているのか，腰曲がりをきたす抗パーキンソン薬の影響はどうかという質問があった．また，ジストニアの有無，広背筋等の筋強剛の評価を今後例数を増やして行って欲しいとのコメントがあった．

本研究は，PD 患者における脊髄手術において術後の良好な管理をするためには DBS 等の施行が効果的であることを示すものであり，臨床的に意義深く価値のある業績である．

よって，本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める．